
少女1人>リリカルマジカル

Aska

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女1人>リリカルマジカル

【Nコード】

N2378Z

【作者名】

Ask a

【あらすじ】

初投稿です。一人の少女を救えば、多くの少女たちを不幸ににしてしまう。原作知識がうる覚えの主人公。それでも少女を助きたい。これは少女を救うために原作に立ち向かう物語である。「お兄ちゃん、なにかいてるの?」「あ、待ちなさい。お兄ちゃん今かつこいいこと書いてるんだから」（注意：主人公ものすごくマイペースです）

プロローグ（前書き）

初めて小説を書きます。投稿します。
自分の書きたいように書いていきますが、よろしく願います。

プロローグ

俺のじいちゃんはよく放浪していた。別に痴呆だったわけではないし、夢遊病を患っていたわけではない。

文字通り様々な場所や、見知らぬ土地をふらふらするのが好きだったらしい。それこそ世界をまたにかけて。じいちゃん曰く「放浪じゃない冒険だ」とよく言っていたが、家族の誰一人として「冒険ではなくただの放浪だろ」という扱いだったのは記憶している。

ちなみに、なぜ今こんな話をするのかというと簡単にいえば俺もその血を受け継いでいるというだけだ。もっとも俺はじいちゃんみたいにふらふらできず、しがない会社員として日々を過ごしていたが。

しかし血は濃く、物心ついた時から放浪していた。大人になつたらさらに放浪していた。この放浪癖から小学校の「将来の夢」という作文で「冒険家になりたい」と言ったら母にまじ泣きされた。あわてて「きちんと安定した職にはつきます」と言っただけで寝たのはいい思い出である。

「だからこそ来世では冒険家になりたいんですよ」

「転生するって言っただけでいきなり夢語られるとは思いませんでしたよ」

夢は大切だろ。生きる動力源だ。…なぜ溜息を吐く死神よ。

「もう死んでいるでしょ」

「でも転生できるんだろ？」

「さっきまで死んだこと聞いて泣いて愚図って落ち込んでいたのに」

「昔から難しいこと考えすぎると頭がオーバーヒートして似非悟り状態になるから」

「それやばくないか」

死神にやばい人認定されるのってなんかいやだな。あと敬語がなくなってますよ。

さて、説明された死神の話の一つずつまとめてみよう。

?俺が放浪癖を発揮して探索をしていたら、トラックにひかれた。

?けど無事だった。病室で知り合い、隣になったおじいちゃんおしゃべりしていた。

?死神は寿命でご臨終となるおじいちゃんの道先案内人だった。

?お空へ行きましよう、と死神がおじいちゃんに言ったが、おじいちゃん拒否。

まあそれ自体はよくあることらしく死神実力行使。

?おじいちゃんピンチ。死神の手から逃れるためにまさしく死闘。

死闘に夢中でつい隣で寝てた俺を盾にする。

?俺が逆にご臨終となり、両者無言で立ち尽くす。

?「こんなつもりはなかった」と涙ながらおじいちゃん自首。「熱くなつたこちらも同罪だ」と死神も落ち込む。

?とりあえずおじいちゃんを送り届け、上に掛け合ったら「…転生させてあげよう」と不憫そうに言ってくれた。

?なので、死んじゃったけど転生できます。今ここ

「…とりあえずどこに転生するんだ」

「まとめたのにスルーするのかよ」

「まあ、おじいちゃんには手紙で謝罪文もらったし、死神からも謝ってもらったし、上の御方には同情されたし。これ以上はいいさ」

「…さんきゅー」

男(?)の友情を育みながら、転生先について考える。やっぱり

放浪しがいのある場所がいいな。あと転生と言ったら能力とかだよな。冒険するのにどんなのがいいかな。幸い願いも叶えるって言ってくれてますし。

「お前の要望とこちらの都合から考えた結果、『魔法少女リリカルなのは』の世界が妥当かと思うんだが」

「おお。リリカルでマジカルな世界か。確かに面白そうだな。次元世界にはいろんな生き物いるし、場所もある。魔法もあるから冒険のしがいもありそうだ」

「…普通そこは原作介入とかでわくわくするところじゃないのか？」

死神がいうことはもつともだろう。だが、ぶっちゃけると俺は原作を知らない。二次小説とかでいっぱい読んだことはあるけどそれだけだし。それにリリカルの原作ってけっこう簡単に世界滅亡する場面多すぎなんだけど。うる覚え知識で下手に介入して死にたくない。

そんなわけで原作は登場人物たちに任せる。さすがに俺が直接かわるなら見捨てられないだろうが、それも願いで問題ないだろう。

「とりあえず願いは決まったか？多少は大目に見るが世界観壊すのはやめてくれよ」

「了解。まず生まれは管理世界で、魔法の素質は高めで頼む。親は魔導師でやさしい人がいいな。あと将来冒険家になつても「いいよ」って言ってくれる人ね。それでレアスキルとして「瞬間転移^{レポート}」が欲しい。魔力は使わず、いつでもどんな時でも好きな場所、世界に移できるとなおい。あ、もちろん転生しても男。できたら前は一人っ子だったし、兄弟とかも欲しいな」

「内容はすごく現実的で助かるのに、すごくずうずうしく感じる」

死神がなんかぶつぶつ文句言っているが気にしない。設定多すぎ

だろとかなんか言っているけど知らん。さっき願いの数とか言われてないし、能力オンリーとも言われてないもん。

「しかし「瞬間転移」か。それでいいのか」

「それがあれば世界渡るのも簡単。家帰るのも簡単。危なくなったら即転移して逃げられる。魔力切れ起こしても大丈夫」

「それでも冒険家かよ」

「志望だ。だいたい俺は放浪するのが好きなんだ。正直放浪家が正しいのだから響きがなんかいやだし」

「はいはい」

なんだかんだでこうして俺は転生することになりました。

第一話 幼児期？

「お兄ちゃん今日はどこに行くの？」

「今日はあつたかいところに行こうか。なんか温泉とかで足をちやぶちやぶしたい気分だ」

「おんせん！私も行くっ！」

「おー、じゃあしっかり手え握ってるよ。では行っきまーす！」

双子の妹引き連れて今日も元気に放浪しています。いやー、妹っ
ていいね。かわいいし、小さいし、やっぱりかわいいし。ロリコン
の領域にはいくつもりはないが、シスコンの領域なら俺いっていい
や。そんなことを考えているうちに転移完了です。

「お兄ちゃんここは？」

「前に母さんの同僚の人が『最近肌が荒れてきたわ…、温泉でも行
きたい。でも上層部が無茶ばっかり言うし。もうパンフレット見て、
脳内で妄想するしかないわね！あはは』と徹夜明けのハイテンショ
ンで言っていたのでちょっと拝借して見せてもらった温泉宿です」

「お母さんもお肌気にしてるのかな？」

「どうだろ。母さんって三十代なのに見た目若いしね。まあ、うる
おい成分たっぷり温泉卵でもお土産にしようか」

「うん！」

よろこんでくれるかなー、と笑顔で話す妹に頬が緩む。実際母さ
んなら、俺たちにプレゼントでもされたら狂喜乱舞するだろう。喜
んでくれるのは間違いないが、そのあと「愛してるわ！！」と抱
擁してくるだろうな。同僚さんと同じシフトだったはずだからテン
ションに関しては目をつぶっておこう。

「それじゃあ、一回家に帰って卵3つぐらいとってこようか」

「家に帰るの？」

「俺たち4歳児。無一文」

「でもお金ないとおんせん入れないよ」

「俺たち4歳児。幼児は無料」

「……………」

無言はやめて。マイシスター。

家に帰り、冷蔵庫から卵を取り出す。3つあるから2つは俺が持った。卵を受け取った妹は「ころころだあ」と両手で楽しそうに触っている。手で持つてると落とすぞ、と俺はとりあえず忠告する。絶対落とさないもん、と妹はぷうと頬を膨らませる。しかたがない。もし落としても大丈夫なように、すぐ転移で拾えるよう気を付けておこうと思う。

温泉宿に行き、さすがに幼児2人だけを入れてくれるかわからない。なので「お姉さん。お母さん先に温泉に入ってるから俺たちも入っていい?」「あら、お母さんと一緒に入らなかつたの?」「お姉ちゃんといた。でも温泉に入りたくなつたの」「あらあら」という会話を経て、「温泉ではお母さんの言うことちゃんと聞くのよ」というありがたい言葉をもらって無事入浴。ちなみに妹はお姉さんから見えないとこでずっところころしてた。

「たーま〇まごー! たーまた〇ごー!」

「なぜその歌を知っている」

「歌あるの？」

「俺のベストソングの1つだ」

温泉で一緒に熱唱した。周りの人に微笑ましそうに見られた。

温泉を満喫し、無事帰宅。母さんに「おかえり」を言うのが、俺たち兄妹の決め事の1つなので、必ず母さんの帰宅時間前には帰る。俺は暇なので温泉卵をデコレーションしようかと思ったが、妹がたまごちゃんに夢中なので断念した。さすがにケバい卵を愛でる趣味は妹にもないだろう。

「ただいま。…何してるのあなたたち」

「おかえりなさい、お母さん！私たまごをいーこいーこしてるの」

「おかえり、母さん。俺はそんな妹を愛でてるの」

母帰宅。やはり職場は激務なのか、髪が傷んでおり、顔に隈ができていた。それでも俺たちには笑顔で優しい母親。今も見ただけでは、幼児二人が食べ物で遊んでいるように見えるだろうに母はにこにこ笑っている。後でそれとなくお叱りは受けるだろうが。

俺と妹は卵を手に抱え、母のもとへ向かう。不思議そうな母親に打ち合わせ通り俺たちは声をそろえた。

「お仕事お疲れ様！温泉卵作ったから一緒に食べよう！」「」

「あつ…」

母さんは一瞬泣きそうな顔になったが、すぐに笑顔で俺たちを抱きしめた。俺たちも卵を落とさないように抱きついた。

「ありがとう。アルヴィン！アリシア！」

俺、アルヴィン・テストロッサ。

母、プレシア・テストロッサ。双子の妹、アリシア・テストロッサ。

卵は多少パサパサしてたけど、おいしかったです。

第一話 幼児期？（後書き）

原作のお二人ですが口調が変でなければいいな。

第二話 幼児期？（前書き）

初めて感想をいただきました。ありがとうございます。

正直に言おう。私はシリアスが苦手である。

第二話 幼児期？

「うわぁー」

「うわぁー？」

俺の声に反応した妹と一緒に声を出して真似してきた。ちょっと面白かったので「うほぉー」やら「ヒヤッハー」と言って楽しんだ。少しすると飽きたのか、妹は絵本を開いて読み始めてしまった。少し寂しかった。

時間が経ってなんであんな声が出たのか思い出した。そう、テストタロツサだ。テストタロツサといえば、フェイトさんの家系である。フェイトさんはリリカル物語の一番最初無印に出てくるヒロインであり、「天然」とか「わがままボデイ」といった代名詞がついていたはずだ。さらに俺の母親であるプレシアさん。あんな女王様になるなんて、人って本当に変わるんだな。あはは…いやいや、それよりも前に考えなきゃいけないのが、アリシアだろ。享年5歳って確か見たことがある。つまり俺も死亡フラグ。

「…うわぁー」

まあ、今俺にできることなんて少ない。俺達4歳だし。だから今まで棚上げにしてきたんだ。というか転移使えば俺は問題ない。

問題はわが妹である。もちろんアリシアは俺の大切な家族だ。5歳で亡くなることしかわからないから、事故がいつ起きるかも知らない。それでも俺はアリシアと常に一緒にいるため助け出すことは容易だろう。そうなれば、母さんも狂うことなく、俺も妹も生きていける。家族みんなハッピーエンドだ。

…でもそのあとは？

「……………」

「お兄ちゃん？」

「ん、いやなんでもない。絵本はもういいのか」

「あつ。ねえねえ今度はこの絵本みたいな世界に行きたい！」

「『どろぶつのおごころ』か。アリシアは動物好きだもんな」
「うん！」

原作をあまり知らない俺だけどわかる。この少女を助け出すこと
ですべての物語が狂うだろうことを。

それでも俺はたった一人の少女の笑顔を守りたいと思った。

とりあえず今俺ができることを精一杯に頑張ろう作戦（その1）

「母さん、仕事辞めて」

「ア、アルヴィン。いきなり何を言いだすの？」

「だって母さん、いつもすごく疲れてる。そんなに大変なら仕事辞
めて、別の世界で心機一転しようよ」

「難しい言葉を知ってるのね。でもね、お母さんの仕事がなくなっ
たらご飯やお洋服もなくなっちゃうのよ」

「大丈夫。母さんは魔導師ランクSだし、魔導工学の研究開発者と
しての功績もある。さらに美人だからすぐに職も男も見つかる（っ
け）、って同僚のお姉さんが言ってたよ」

「（人の息子になに教えてるのよ）」

「なあ、アリシアも母さんがもつと元気に一緒にいて欲しいよな？」

「うん！お母さん、私もつとお母さんと一緒にいたい。それにお母さんが心配なの」

「…アリシア」

「（いいぞアリシア。そこで上目づかいで涙を目にためる。そしてさりげなくダメ？と小首を傾げればなおよし）」

「（目に涙を浮かべるには、おばけこわいおばけこわいおばけこわい……ぐすっ）」

「うっ……」

ちなみに無理だったけどいい線まで行った。

？

第二話 幼児期？（後書き）

…実は作者も事故の日を知らなかったりする。

第三話 幼児期？

急に風を感じたくなつたことはないだろうか。俺は結構ある。前世ではよく無意味に自転車を乗り回したものだ。河川敷にあるサイクリングロードを当てもなく走り続けたことや、唐突に自分の大学まで行つてみようと思つて越えて片道7時間走つてしまったこともある。おかげで両親からは「絶対にお前はバイクの免許だけは取るな」と社会人になつてからも口酸っぱく言われたものだ。

「それでも人は風を求めてしまふのです」

「よくわかんない」

「えー、アリシアにはないの？自転車でかつ飛ばしたい時とか」

「私三輪車だもん」

そりゃ無理だな。急斜な坂道をブレーキなしで突貫させてみようか。…やめとこ。母さんがすごい表情で迫つてきそつだ。

「うーん。わが妹にも風を感じる良さを味わつてほしかったんだが」

「風かー。鳥さんになれたら気持ちよさそつ」

「鳥か…、人間も空が飛べたらいいのに」

「お兄ちゃんは飛べないの？」

「いやいや、お兄ちゃん頭飛んでるとは言われたことあるけど、実際は無理だから」

「魔法でも？」

「……あ」

素で魔法忘れてた。だって転移がすごく便利なんだもん。

魔法はまた今度にすることにして、一緒に風を感じる方法を考えました。

「高いところとか」

「…それだ」

あっさりと意見が出てきた。さっそく高いところで風を感じよう

と妹の手を握り、高いところへ転移する。雲を突き抜けるような建物の上。周りにも高層ビルが立ち並び、下には米粒のように小さい人間が見える。そして突き抜けるような風が俺たちを包み込む。吸い込まれるような青空の下で俺たちは心から叫んだ。

「サムイサムイサムイ、サアームウウーイイーイー!!!」

「はあむういーいー!!!」

慌てて転移して家に帰る。

そのあと、毛布と一緒に包まりながら、怒った妹にぼこぼこ叩かれてしまう俺であった。

第三話 幼児期？（後書き）

実は一番上の文は作者の実話だったりする…。

筆が進んだので夜に第四話載せたいです。

第四話 幼児期？

今日は久しぶりに母さんが休みを取れた。労働基準法無視しまくりな労働時間は、地球なら即訴えられるレベルだ。上層部のやつらの部屋に移して育毛剤を除毛剤にすり替えてやろうか。まじで。母さんが家にいるのが嬉しいのか、アリシアがごろごろと母さんの膝の上で甘えている。猫みたいだ。マタタビプレシアここに降臨！うん、語呂が悪い。

「お母さん」

「なーに」

「えへへ。お母さんだーいすき」

「…っつ」

「母さん、はいティッシュ。ごみ箱取ってくるから、ちーんしてて」

さすがに母親の熱いパトスを妹には伏せておかないと。

「…寝ちゃったわね」

「ほんとだ。毛布取ってくる」

「ありがとう」

眠ってしまったアリシアの頭を撫ぜながら母さんは幸せそうに微笑んでいる。俺は寢室から毛布を取り出し、二人のもとに戻った。妹にかけてやると母さんはくすりと笑った。

「すっかりお兄ちゃんね」

「そうかな？」

「そうよ。あなたは生まれた時から……、まあいろいろあったけどしっかりした子だったわ。うん」

「あはははは」

うわあ、いろいろと心当たりがありすぎる。

「あなたってば生まれて4日でいきなりベビーベッドから忽然といなくなるがあったね。少しして病院の廊下でころころ転がっているのが発見された時は心臓が止まるかと思ったわ」

「（あ、暇になってあっち行きたいなー、って思ったら転移しちゃったやつか）」

「覚えてないわよね。まさかレアスキルが生まれてすぐ使えるなんて」

「（めっちゃ覚えてる。死神に「いつでも」ってお願いしたから生まれてすぐにでもできたんだろう。いきなり場所が変わってびっくりしたなー）」

そのあとも、間違えて転移して迷惑かけたり、上層部の頭に誤っ

てバケツ転移させたり、父さんの背中に空中突撃したり、上層部の服を誤って転移させちゃったり…。あれ。全部原因転移じゃね？

「ところでアルヴィン。『コーラル』はどうしたの？」

「え、コーラル？あいつは今出張中だよ」

「…なぜインテリジェントデバイスが出張しているの？」

「母さん、どんなものにも適材適所はあるんだよ。あいつは今もつとも輝ける場所で頑張っているんだ」

「マスターの手の中以外に適所があるなんて聞いたことないわ…」

実は俺、デバイス持っていたりします。しかもインテリ入ってます。母さんは俺たちが転移を使って放浪しているのを知っているため、危険がないように作ってくれたものだ。正直俺が魔法の存在を忘れていたのも、コーラルを出張に出したまま忘れ…ごほん。より仕事を頑張ってもらえるように専念させていたためそつとしておいたからだ。

「ちゃんとデバイスは携帯しなさい」

「はい」

「もしも何かあったらと思うとお母さん心配なのよ。危なくなつた

らすぐに念話で知らせること。それを聞いた周りの人が助けてくれることもあるから」

…なんだかデバイスが警報ブザー見たいな扱いな気がした。

第四話 幼児期？（後書き）

これからはのんびりゆったり書いていきます。

第五話 幼児期？（前書き）

毎日更新やってみようと思った瞬間、パソコンフリーズ。間に合っ
てよかった。

今日は寒いなと思い、書いてみた。しかし、パソコンたちあげて見て、
1000 超えていたのにはびっくりした。ありがとうございます。

第五話 幼児期？

「ゆーきや」

「こんこん！」

「あーられや」

「こんこん！」

「ふってーはふってーは」

「ずんずんっーもる！」

周りは真っ白けっけ。俺と妹は今日も転移使って放浪しています。今日は妹が「しろくまさんかわいいな」と言ったので、「見に行くと？」と俺が言ったことが発端です。それを聞いた母さんに「しろくまは時間が取れたら動物園に連れて行ってあげて。だから危ないからやめて」と言われた。どうせなら、と雪で遊ぶことにした。防寒ばつちり。ぬくぬく。

「お兄ちゃん。ゆきいっぱい！」

「いっぱいだね」

「ゆき！つめたい！」

「こらこらアリシアよ。俺から離れないの」

雪景色の中を走っていきそうな妹を止める。もし危なくなったらすぐに転移できる俺のそばにいてくれないと困る。転移は俺が触れているものを任意で一緒に飛ぶことも、とばすこともできる。なので放浪している間は妹とできるだけ手をつないでおくように心がけている。

でも妹はむー、とちよつと不満そうだ。確かに一面雪景色を走り回ってみたいのはわかるな。

「妹よ。名案が浮かんだ」

「めいあん？」

「俺と一緒に走ればいい」

「お兄ちゃんと走るの？」

「…ついてこれるか？」

「いく」

俺は妹と手をつないで駆け抜けた。

途中でずっこけて俺たちが真っ白けっけになった。

「つべたい」

「じめんなさい」

帽子や服に付いた雪を二人で落としていく。しかしどうせ真っ白なら、雪合戦とかする？と聞くと、する！と元気な返事が返ってきた。子どもは風の子。元気な子。

「いくぞーアリシア！」

「うん！」

あまり雪を固め過ぎないように様にして投げる。アリシアはきゃー、と雪ん子になる。お返しとばかりに投げってくる雪を俺はひょいと避ける。アリシア当たる。俺避ける。

「ふふふ。そう簡単にはあたらな、ぶはあっ！ちよ、ちよとアリシアさん。雪を下から巻きあげないで！鼻！鼻にいい！ぶふおあー！」

「むー!むー!」

そのあと雪だるま作ったりして元気に遊びました。

第五話 幼児期？（後書き）

次は作者自身も棚上げしてきたシリアスいきますか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2378z/>

少女1人> リリカルマジカル

2011年12月10日23時54分発行